

聖書における40年の意味

三枝 禮三

序言

- I. 一般宗教における数の象徴的用法
 - II. 旧約聖書における40年の意味
 - III. 新約聖書における40年の意味
- 結語

序 言

1951年開学の北星学園女子短期大学は、開学40周年の節目を迎え、本紀要も40周年を記念する記念論文集として刊行される。この際、何はともあれ、本学の拠って立ってきた聖書における40年の意味について、いささかなりと考察しておきたい。

もとより、新約聖書に見られる最も基本的な原始キリスト教の観点に立てば、記念すべきは、キリストの復活した「主の日」、すなわち日曜日だけである。それ以外の「日、月、時節、年など」を何か特別なもののように尊重して守ることは、かえって「あの無力で頼りにならない支配する諸霊の下に逆戻りし、もう一度改めて奴隷として仕えようと」することとして排されている（ガラテヤ人への手紙、4；9f.）。「諸霊」（ $\Sigma\tau\omicron\iota\chi\epsilon\acute{\iota}\alpha$ ）¹とは、ユダヤ教的律法主義と異教的偶像礼拝双方の諸霊で、日、月、時節、年などはその支配の下に置かれていると言いつたされてきたが、それら世のもろもろの霊力はキリストの復活によって打ち破られ、キリストを信ずる者はその支配下から既に解放されてしまっている（コロサイ人への手紙、2；8～23）とされているからである。

しかし、それは決して、過去を忘れてたり歴史を無視したりすることを意味しない。かえって聖書は何よりも歴史を重んじる歴史の書である。例えば申命記には、「試みにあなたの前に過ぎ去った日について問え」（4；32）とある。だから、ヘブル語聖書中、前の予言者と呼ばれている文書群の内容は、

歴史または歴史物語である。過去の歴史の中に将来にまでかかわる神の意思が既に啓示されているという歴史意識を示すと言えよう。

それゆえ、聖書の記録している歴史をとおして単なる40年の意味を考察することには、もとより過大な意義は認められないとしても、いささかの意義はあるかもしれない。

1. Cf. Burton; Galatians. (ΤΑ ΣΤΟΙΧΕΙΑ ΤΟΥ ΚΟΣΜΟΥ) P. 510

~518

I 一般宗教における数の象徴的用法

聖書の世界に入る前に、一般宗教における数の象徴的用法について瞥見しておきたい。おもに、A. シンメル¹による。

数に関する人間の関心は、既に昼夜が交替するリズム、月の満ち欠け、その他自然現象を観察することをとおして、ごく早い時期に生まれたにちがいない。膨大な量の数に関する神秘的な計算書がピタゴラス派の学徒のもとに発見されている。ピタゴラス学徒たちは、数を形而上的な力を秘めたものと見ていた。その力の神秘的計算は、神秘主義的ユダヤ教のカバラやイスラム教のフルフィスによる数に関する思弁によって一層促進された。その際重要なのは、数と文字の交換可能性である。個々の数はそれぞれ固有の意味をもっていたのである。幾つか例を上げて、その意味を拾って見よう。

1は、複数とちがって、総ての数の基数である。それゆえに、すべての複数をすらそれ自身の中に統括する神的統一の数とされる。

2は、対立、両性、分裂の数である。引き付け合うことと反撥し合うこと、陽極と陰極（陽と陰の中国の対立概念の中に現れたのが多分最初の例だろう）等に見られる生きものの原理と同様である。2は、すべての偶数同様、奇数の男性的数とは反対に女性的数と考えられている。ペルシャ圏では、アフラ・マツダとアーリマンという二者の対立が、中立的なツルヴェンのもとで、第三者、即ち神的霊を持つ両極の成就者の中に止揚される。

3は、最初の幾何学的平面三角形において提示された総合である。また、哲学的には、ヘーゲルによる正・反・合の三位一体的リズムの中に提示されている。神神に関する3は、太古からの数である。モイラ（ギリシャ神話の運命の女神）、ノルネ（北歐神話の運命の女神）、マーテル（地母）は、3の数、またはその3倍数（芸術の9女神）に発展していく。三つの頭を持つ

神神は、ケルトからインド圏にまで見られる。形而上的概念は三段階に展開される。即ち、インド的なsat-cit-ananda、または、存在—認識—愛としての父—子—聖霊のようである。典礼の中でも、3は重要な役割を演じる。例えば、イスラエルの神殿での三分割、ほとんどの宗教儀式で三回繰り返される神への呼び掛け。ヒンズー教の聖典の朗唱の終わりでの“Shanti”の三唱にもそれが見られる。神秘主義の救済の道もまたpurgativa（浄化）、illumina-tiva（照明）、unitiva（合一）の道として三重の段階が用意されている。

4は、物質的な数と目される。即ち、この数は、月の満ち欠けや太陽の位置を宇宙的なものと結び付ける。そのことから、四つの元素、四つのパラダイスの流れ、四季、ヘシオドスの四時代、ダニエルによる四つの世界帝国、或は、インドの四つの「カルパス」、ゾロアスター教の四期などが生じた。イスラム教徒は、四人の妻をもつことを認められ、四人の正当なカリフを承認する。また、イスラム法は、四つの源泉をもち、四つの正規の法律学校をもつ。完備を意味する数としては、「四つの手をもって着手するなら、四つの目をもって期待せよ」というようなトルコの諺の中にそれが見られる。

しかし、このように累進して40になると、4とはまたまったく別のそれ自身の特別な意味をもつ数として用いられている。すなわち、40は、期待を意味する数（妊娠期間は7×40日間）であり、準備を意味する数（回教の托鉢僧の準備期間は40日間）である。コーラン（46；14）は、40才を人がその充分な強壮さに達する年令としている。それは、マホメットが召命を受けた歳であり、アブ・バクルが回心させられた年令である²。後期ユダヤ教においても、自立した決断を下し得る40才になるまでは律法学者にはなれないとされている³。そのほかにも、特にイスラム圏では、40人の盗賊、40人の托鉢僧、40人の酒聖のように、多数の意味で常用されている。イスラムの知識人は、愛称句として予言者の四十の言葉を収集する。

以上、瞥見してきたところでは、一般宗教における数はそれぞれ特別な象徴の意味をもつものとされている。しかし、それぞれの数が象徴する固有の意味は必ずしも単一ではなく、むしろ多様である。しかも、その豊かな象徴的意味の多様性を通して、いくらかは何らかの方向性を指し示している場合もある。しかし、その中で40という数について見れば、特に重要な意味を与えられているとは言えないし、重用されているとも言えないようである。

1. Schimmel, A ; Zahlensymbolik. RGG. Bd. VI, S. 1861 ~ 1864.
2. Pope, M. H. ; Number, IDB. III, P.561 ~ 567
3. Balz, H. τεσσαερακονταετη TWNT. VI, S.137

II 旧約聖書における40年の意味

旧約聖書ヘブル語の《*árba'im shânâh*》40年は、一般宗教におけるそれに比すれば、はるかに重要な意味を与えられ、はるかに重用されているように見える。

M. H. ポープも「4の倍数の中で、象徴的で聖なる数として最も豊かな意味をもっているのは、40である」と言っている。事実、その前の数、30または30年は、ダビデが王位についた歳とされている以外にはほとんど特筆されていないし、後の数の50または50年にしても、ヨベルの年（レビ記25章）としての重要な意味を与えられながら、旧約聖書の文書中に現れる頻度はそれほど多くはない。それら前後の数に比して、40または40年は、多様な意味をもつものとして、はるかに言及される頻度が高い。

言及されているテキストを検索して当たってみると、40または40年の意味は、用法によっておよそ次の三つの場合に大別できそうである。

(1) 「充分な長さ」を意味する場合

まず、イサクは40才のとき、リベカと結婚させられた²。エサウが結婚したのも同年齢だった³。カレブが、モーセによりカデシ・バルネヤからカナンの地へ偵察隊員として派遣されたのは、40才のときであった⁴。サウルの子イシュ・ボシュトが王位につけられたのも同年齢だった⁵。これらの用例から、40才はまず、人間が成熟に達する年齢と見なされていたようである。ということは即ち、40年がちょうど一世代の長さを意味するわけである。従ってまた、40年の二倍は、人間が実り豊かな老年に達する年とされ⁶、三倍は寿命の最長年数とされているのである⁷。

士師たちの40年間に亘る統治は⁸、およそ一世代を表しており、士師記3章30節の80年は、2世代に亘ったことを意味する。同じく、ダビデ、ソロモン、ヨアシの40年に亘る統治⁹も、一世代の長さを意味するが、その長さは必ずしも偶然または通例の長さということではない。イスラエルの最初の王とされるサウルですら、40年に亘る統治者のリストから申命記史家によって

何らかの理由でその名を削除されているからである¹⁰。

しかし、何よりも、イスラエルの民の歴史に決定的な荒れ野での40年の期間というものがある¹¹。それは、言うまでもなく、一世代がすべて死に果てるに十分な長さを意味した¹²。更にその出エジプトから神殿造営までに至る480年¹³でさえも、40年を12部族がそれぞれ神殿造営のために猶予された期間の総和、即ち、十二世代の長さとして算定されているのである¹⁴。

つまり40年は、人間の生涯または忍耐の長さについて、十分に長い期間を表す完全数として用いられているのである。しかし、その「十分な長さ」に、少なくとも二つの異なった意味が重なっているらしいのである。即ち、それは一面では刑罰の期間としての十分な長さであり、もう一面では恵の期間としての十分な長さである。

1. Schimmel, A., Op. cit., 後期ユダヤ教では7にだけ劣る。

2. 創25; 20

3. 創26; 34

4. ヨシ14; 7

5. サム下. 2; 10, M. ノートはこれを伝来の数でないとする

6. サム下. 19; 34f., 詩9; 10

7. 創6; 3, 申34; 7

8. 士3; 11, 8; 28, 13; 1, サム上. 4; 18

9. サム下5; 4, 列王上2; 11, 11; 42 (cf. 歴代上29; 27, 歴代下9; 30), 歴代下24; 1

10. Noth, M., Überlieferungsgeschichtliche Studien: Die sammelnden und bearbeitenden Geschichtswerke im AT., 山我哲雄訳P. 60f.

サムエル記上13; 1によれば、サウルの王国が存続したのは「二年間」にすぎない。この部分のテキストは、後に破損したかこの節全体が極めて後代の加筆であると一般的に推測されている。…しかしながら、サウルの王国が明らかに極めて短命であったことを考えるならば、この数字は歴史的に考えられぬことでも不可能でもない。

11. 出16; 35, 申2; 7, 8; 2, 29; 5, ヨシ. 5; 6, ネヘ9; 21, 詩95; 10, アモ2; 10, 5; 25

12. 民14; 33, 32; 13

13. 列王上6; 1

14. 歴代上6; 3~8, ヘブル神聖法集5; 29~34 Balzは、ノートの単独年代説をとる

(2) 刑罰の期間を意味する場合

輝かしい出エジプトに成功したイスラエルの民でありながら、何故40年間も荒れ野での漂泊をしなければならなかったのだろうか。一世代のすべてが死に果てるまで荒れ野での放浪生活をしなければならなかったのは何故か。伝承資料によれば、約束の地カナン偵察隊員の報告に臆し侵入を拒否した民の背信の罪に対する刑罰と見做されている。「お前たちの子供は、荒れ野で四十年の間羊飼となり、お前たちの最後の一人が荒れ野で死体となるまで、お前たちの背信の罪を負う。あの土地を偵察した四十日という日数に応じて、一日を一年とする四十年間、お前たちの罪を負わねばならない。お前たちは、わたしに抵抗するとどうなるかを知るであろう」¹ここに羊飼とあるのは放浪者の謂である。「主はイスラエルに対して激しく怒り、四十年にわたり、彼らを荒れ野にさまよわせられ、主が悪と見なされることを行った世代の者はことごとく死に絶えた」²とあるとおりである。主に対するイスラエルの背信と不従順は、それ以前から、金の子牛を造って拝した偶像礼拝や、主を試みるという転倒した在り方で繰り返されてきて、ついにここに至ったわけである。これに対して主は、イスラエルの進路を阻み、刑罰を課するのである。「四十年の間、わたしはその世代をいとい、心の迷う民と呼んだ。彼らはわたしの道を知ろうとしなかった。わたしは怒り、彼らをわたしの憩いの地に入れないと誓った」³。またこうある。「イスラエルの人々は荒れ野を四十年さまよい歩き、その間にエジプトを出て来た民、戦士たちはすべて死に絶えた。彼らが主の御声に聞き従わなかったため、我々に与えると先祖たちにお誓いになった土地、すなわち乳と蜜の流れる土地を、彼らには見せない、と主は誓われたのである」⁴。

以上に見てきたテキストの語っているところによれば、出エジプト後のイスラエルの荒れ野での40年は、単なる探検の旅などではなく、明らかに放浪の刑罰の期間であると言ってよいだろう。

しかし、刑罰の期間を意味する40年は荒れ野の放浪期間だけではない。それ以後も、異教の民の抑圧下に渡される期間としてしばしば言及される40年が、同様に刑罰の期間を意味する。

例えば、士師記には、「イスラエルの人々は、またも主の目に悪とされることを行ったので、主は彼らを四十年間、ペリシテ人の手に渡された」⁵とある。また、エゼキエルは、各一年を一日として、ユダの家の罪を四十日間、

ユダに代わって負うことを課せられる⁶。それは言うまでもなく、ユダに対する刑罰としてのバビロン捕囚の期間を意味する。翻って、エジプトに対しても、創造者を僭称した罪に対する刑罰として40年の荒廃期間を課するのである。「わたしはエジプト人の地を、荒れ果てた国々の中で、最も荒れ果てた地とする。その町々は荒れ廃れた町々の中で、四十年の間最も荒れ果てたものとなる。わたしはエジプト人を諸国民の中に散らし、国々の間に追いやる⁷」。歴史的事実としてのバビロン捕囚の期間はむしろ50年に近いのであるから、40年はここでも、荒れ野の放浪期間をこれに重ねて、特別なその象徴的意味で用いられているわけであろう。

以上のように、40年には、まず刑罰の期間を意味する場合があると言ってさしつかえないであろう。

1. 民14 ; 33f.
2. 民32 ; 13
3. 詩95 ; 10f. Schmidt, H. S. 95
4. ヨシ5 ; 6
5. 士13 ; 1
6. エゼ4 ; 6
7. エゼ29 ; 11f.

(3) 恵の期間を意味する場合

しかし、荒れ野の40年は、刑罰の期間としてだけでなく、恵の期間として見られている場合もある。

イスラエルの民は、カナン到着まで荒れ野時代の40年を通して、ヤハウェから与えられたマナによって養われた。「イスラエルの人々は、人の住んでいる土地に着くまで四十年にわたってこのマナを食べた。すなわち、カナン地方の境に到着するまで彼らはこのマナを食べた¹」。また、モーセは、ヤハウェの言葉を告げて民に言う。「わたしは四十年の間、荒れ野であなたたちを導いたが、あなたたちのまとう着物は古びず、足にはいた靴もすり減りはしなかった」だから、「足がはれることもなかった²」。それを受けて、遙か後のバビロン捕囚から解放されたネヘミヤは、荒れ野時代に注がれたヤハウェの憐れみ深さを賛美して言う。「四十年間、あなたが支えられたので、彼らは荒れ野にあっても不足することなく、着物は朽ち果てず、足もはれるこ

とがなかった』¹。

のみならず、ヤハウェは、その臨在によって、広大な荒れ野の長い旅路を祝福された。「あなたの神、主は、あなたの手の業をすべて祝福し、この広大な荒れ野の旅路を守り、この四十年の間、あなたの神、主はあなたと共におられたので、あなたは何ひとつ不足しなかった」²。それはまた、父が子を訓練するのに似た訓練の期間であった³。従って、ヤハウェは、民からの報いや献げ物などを求めはしない。「イスラエルの家よ、かつて四十年の間、荒れ野にいたとき、お前たちはわたしに、いけにえや献げ物をささげただろうか」⁴。ヤハウェの憐れみは一方的である。そこで、ヤハウェは宣言する。「お前たちをエジプトの地から上らせ、四十年の間、導いて荒れ野を行かせ、アモリ人の地を得させたのはわたしだ」⁵。

エレミヤは、その荒れ野時代におけるヤハウェとイスラエルの関係を密月時代に譬えている。「わたしは、あなたの若いときの真心、花嫁のときの愛、種蒔かれぬ地、荒れ野での従順を思い起こす」⁶。フォン・ラートは、その意味するところについて、「荒れ野放浪は、ヤハウェとイスラエルの間の初めの愛の時代であり、最も純粹な関係の時代であった」⁷と語っている。

以上のように、荒れ野時代の40年は、ヤハウェの憐れみ深い配慮が行き届いていた恵の期間であるとする場合も少なくはない。

1. 出エ. 16 ; 35

2. 申29 ; 4, 8 ; 4

3. 9 ; 21, 詩136 ; 16, Schmidt, 240

4. 申2 ; 7

5. 申8 ; 25

6. アモ. 5 ; 25

7. アモ. 2 ; 10

8. 2 ; 2 Weiser, A. 相互の愛と真実の表現

9. G. von Rad, Theologie d. AT, 荒井章三訳 I, P. 380 (改訳して引用)

これまで見てきたように、荒れ野時代の40年という同一の充分な長さが、一方では刑罰の期間とされ、他方では恵の期間とされている。この互いに相反する二つの見方は、どうして生まれ、どのように関係するのであろうか。

ラートによれば¹、まず資料的な問題がある。即ち、荒れ野行進に関する

最終的報告は、三つの資料文書J. E. P. の文学的組み合わせから成り立っている。これら祭儀の領域に起源をもつ表現は、神の出来事に対する一方的な集中の中にある。イスラエルはヤハウェの行為に対して沈黙し、受け身の対象である。これは賛美の中にもまだ影響を与えている様式、救いの事実のみを要約している様式がもたらした特徴である。「種蒔かれぬ地でイスラエルは完全にヤハウェの上に投げ出されていた」。この場合には、両者の関係を蜜月時代としたエレミヤ2；2に見られるような荒れ野時代の理想化が生まれることになる。しかし、やがて、これに対するイスラエルの側の応答の問題が視野に入ってくる。即ちイスラエルの側における無視、不信、その他の罪の繰り返しが問題化される。これらイスラエルの側における罪に対する認識は、比較的後期の王国時代になってようやく成立し²、予言者の協力もあって定着した。エゼキエル書20章に見られる認識がその最も重要な典型である³。そこでは、驚くべきことに、荒れ野時代が未来の審きの予型、判例として叙述されている。ヤハウェは、族長たちと同様に現在の人々をも「もろもろの国民の荒れ野」⁴に導いて審く。エゼキエル以前には、イスラエルの荒れ野時代についてこのように語った人は誰もいない。エゼキエルは、その叙述において神の審きの行為を強調し、それらの審きの中に現在の神の民の上に来たらんとする審きの予表を見ているからである。

資料的な問題に加えて、イスラエルの置かれた歴史的状況の変化に伴う解釈の変化という要素もある。カナン定住後のイスラエルにとって、荒れ野時代の経験はもはや理解不可能となり、あの荒野は、「荒涼とした、穴だらけの地、乾ききった、暗黒の地、だれひとりそこを通らず、人の住まない地」⁵であり、「炎の蛇とさそりのいる、水のない乾いた」⁶不毛な地であった。その後も、脅威にさらされたり、既に破滅してしまったという認識に圧倒されたりする場合には、イスラエルの民にとって荒れ野時代は、否定的な面がより強く意識されたであろう。しかし、バビロン捕囚からの解放がもたらされたような場合には、ネヘミヤにおいて見られたように、荒れ野時代の肯定的な面がより強く意識され、荒れ野時代への賛美が生まれたのも当然であろう。

さて、荒れ野時代の相反する二つの解釈については、六書の叙述は全体的には、エゼキエル書20章とエレミヤ書2章2節の中間に位置すると言われる⁷。いずれか一方だけを強調するということはない。荒れ野時代は、ヤハウェの怒りの時であるとともに、憐れみの時でもある。刑罰の期間であると

ともに、恵の期間でもある。その怒りが憐れみに、呪いが祝福に⁸、刑罰が恩恵に変えられるときがある。それは、ヤハウエの側でイスラエルに対する愛ゆえに「思い返す (nācham)」⁹ ことによる。しかし、そのヤハウエとイスラエルの間の裂け目に一人の中保者的存在が立っている。民のために執り成すモーセである¹⁰。モーセこそ、荒れ野時代におけるヤハウエの刑罰と恩恵という緊張関係の中心ではなくとも、その秘密の最も近いところに立っていた存在であろう¹¹。

1. G. von Rad, op. cit. 379~387 「荒れ野放浪」の項
2. Noth, M., Überlieferungsgeschichte des Pentateuch, 山我訳 列王上12; 28fによれば、イスラエル王国のヤラベアム1世が設けたベテルとダンへの國家聖所の設立と、そこへ、それぞれ一つの「金の子牛」の像が置かれたことを明らかに前提とし、この宗教政策的処置をイスラエルの神からの背反として特徴づけているからである。そのためにこの物語りは、この出来事の原因をシナイに移し、権威あるモーセの口によってすでに契約違反として断罪されたものとし、そしてそれを恐るべき呪いの下に置いたのである。(P. 207) 3. エレ20; 9, 14, 22
4. 同20; 3f.
5. 同2; 6
6. 申8; 15
7. von Rad, S. 382f., Balzも、同じ
8. 申23; 6
9. 同上, エレ18; 8, アモ7; 3
10. 特に出エ32~34章, 使徒7; 38参照
11. Rad, S. 384, ヤハウエとイスラエルの間に亀裂があるにもかかわらず、ヤハウエが同行しようとしたとき、仲介の職務として、天使、天幕、パニーム(マスク)の三つのものが要請されたと言われる。その意味でモーセは中保者そのものではないが、なお中保者的存在である。

Ⅲ 新約聖書における40年の意味

新約聖書における40年(ἐτη τεσσαράκοντα)の意味とその用法は、当然旧約聖書のそれを継承していることが予想される。新約で言及されている40年が、出エジプト後の荒れ野時代を原型としている場合は、特にそうである。しかも、新約に現れるそれほど数多くない40年は、何らか

の意味で原型としての荒れ野時代に関係している場合が多いのである。そこで、一応旧約聖書における40年の意味を三つの用法によって見たように、新約聖書の場合も三つの用法によって検証してみることにする。

(1) 「十分な長さ」を意味する場合

まず現れるのは、使徒ペテロたちによって癒された「生まれながら」(ἐκ κοιλίας μητρὸς)の病人の40才¹という年令で、その40年は、言うまでもなく、彼が病氣或は障害に苦しみ耐えてきた期間の十分な長さを意味するだろう。

また、ステファノの説教中に、ファラオの王女に拾われたモーセは、エジプト人のあらゆる教育を受け、言葉にも業にも力ある者となったが、40才になったとき、同胞を助けようと思いついたとある²。この40年も、取り合えずは、既述の一般的な用法で成熟に要する期間とされてきた十分な長さを意味するだろう。

さらに、パウロが受けたユダヤ人による鞭打ち刑は40を一つ免除されたとあるが³、パウロは特にそこで、ユダヤ人による刑罰とギリシャ人によるそれとを意識的にはっきり区別している。このユダヤ人による40を限度とする鞭打ち刑は⁴、刑罰の期間としての荒れ野の40年に基づいて規定されたものであって、その期間の十分な長さに見合った十分な多さを意味するものであろう。

このように、新約聖書に言及されている40年には、まず一般的な用法に見られる十分な長さを意味する場合を前提し、またこれを継承しているケースが見られる。

1. 使徒 4 ; 22

2. 同 7 ; 22f.

3. コリント第二, 11 ; 24f.

4. 申 25 ; 3

(2) 刑罰の期間を意味する場合

先に十分な長さを意味するケースの一つとして引用したユダヤ人による40を限度とする鞭打ち刑は、言うまでもなく同時に、刑罰の期間を意味する40年の荒れ野時代を原型として前提に持っているケースである。

しかし、ヘブライ人への手紙にはもっと直接的なケースがある。即ち、3章10節及び17節である。

そこには、まず詩篇95；9～11が引用される。「荒れ野であなたたちの先祖は、わたしを試み、験し、四十年の間わたしの業を見た。だから、わたしは、その時代の者に対して、憤ってこう言った。『彼らはいつも心が迷っており、わたしの道を認めなかった』そのため、わたしは怒って誓った。『彼らを決してわたしの安息にあずからせはしない』と」(3；9～11)¹。そして、その意味するところを要約するように記者は、はっきり書いている。「いったいだれに対して、神は四十年間憤られたのか。罪を犯して、死骸を荒れ野にさらした者に対してではなかったか」(3；17)。このように、荒れ野の40年は、ヘブライ人への手紙の記者によって、神の憤りの下にあった40年(προσώχθισεν τεσσαεράκοντα ἔτη)²として、刑罰を意味する期間と解釈されているのである。

特に異色なケースは、ステパノの説教中で、荒れ野時代の40年が犠牲無用だった時代として本来肯定的に理解されていたアモス書5；25からの引用文が、その説教全体の大意に対応するように否定的な意味に変更されている箇所である。即ち、使徒行伝7；42において、ステパノは、『イスラエルの家よ、お前たちは荒れ野にいた四十年の間、わたしにいけにえと供え物を献げたことがあったか』とアモスが肯定的な意味で語っている状況を、神から顔を背けられ天の星などの偶像を拜むままに放置された状況として解釈しなおしているのである。言うまでもなく、それは最も重い刑罰を意味する³。ステパノによれば、荒れ野の40年は何であるよりもまず、神の憤りの下に放置された刑罰を意味する期間であったということであろう。

以上のように、新約聖書における40年には、一般的に十分な長さを意味するばかりか、さらに刑罰を意味する期間として、荒れ野時代が原型として言及されている場合が認められる。その限りでは、新約聖書においても、荒れ野時代を刑罰を意味する期間とする旧約聖書の理解が前提され、また継承されていると見てよいであろう。

1. Septuaginta. 詩94 (95)；9～11からの自由な引用である。

2. ヘブ3；17. 字義的には「40年を憤った」

3. H. Conzelmann, *Die Apostelgeschichte. Handbuch z. NT.* Stählin, G., *Apostelgeschichte.* 神は人間を自分自身の罪に引き渡すことによって、最も重く罰する。

(3) 恵の期間を意味する場合

しかし、荒れ野時代の十分な長さは、ただ刑罰の期間としてだけでなく、やはり、恵の期間としても受け止められていたようである。

例えば、使徒行伝13章18節には、パウロの説教の一節として、「神はおよそ四十年の間 (*ὡς τεσσαερακονταέτη χρόνον*)、荒れ野で彼らの行いを耐え忍ばれた (*ἐτροποφόρησεν*)」とある。ここでも、もちろん「およそ四十年の間」によって考えられているのは、年代記的な報告でなく、典型的に十分な期間の長さのことである¹。その十分に長い荒れ野時代がここでは、神によって耐え忍ばれた恵の期間とされているのである。

同じシナゴグにおける説教の次のくだりに、荒れ野時代の40年と平衡する歴史として、(ダビデの40年の統治期間については何も触れられていないにもかかわらず)、旧約聖書がたった2年を帰しているだけのサウルの統治期間が実は40年だったと述べられている²。言うまでもなく、それは、サウルの統治期間が神の祝福の下におかれていたとすることに外ならない。のみならず、そのことはまた、荒れ野時代の40年が、イスラエルにおける最初の王の統治と同じく、イスラエルの民を選んだ神の選びの業が遂行される典型的な祝福の時、恵の期間として理解されているということの意味するだろう³。

また、先に触れたステファノの説教中でモーセの生涯が各40年毎の3期に区分されている仕方は、ルカ特愛の伝承の継承ぶりを示すものといわれるが⁴、第一期の成熟期に次ぐ第2期のミディアン滞在期間は、一応、準備期と言い得るだろう。しかし、ステファノは、第1期の期末と第2期の期末を鋭く対比するように、「人々が、『だれが、お前を指導者や裁判官にしたのか』と言って拒んだこのモーセを、神は柴の中に現れた天使の手を通して、指導者また解放者としてお遣わしになった」⁵と言っている。隠れていた神が、第2期の期末から今やモーセを通して指導者また解放者として直接歴史に介入して来られた、という見方であろう。それはまたそのまま、第2期の期末から始まる第3期の荒れ野時代を、指導者また解放者としての神の直接の導きの下にあった恵の期間とする見方に通じるであろう。

このように、新約聖書には、荒れ野時代の十分な長さを恵の期間として理

解している場合もある。

1. Balz, op. cit. s. 137
2. 使徒13 ; 21, ヨセファスも40年としている
3. H. Balz, ibid.
4. 使徒7 ; 23, 30, 36.
5. 使徒7 ; 35

以上に見てきたところでは、新約聖書における40年は、ほとんど原型としての荒れ野時代に関する記憶であり、その意味の解釈については、旧約聖書の伝統的理解を継承していると言って差し支えないだろう。その限りでは、これは、新約聖書に独自の理解とは言えない。しかし、新約聖書にはなお、旧約聖書における伝統的理解からはみ出る場合が残っているのである。それは、イエス自身にかかわるテキストにおいて見いだされるものである。

後期ユダヤ教には、メシヤ的関連における40年への言及が見られる。R. アキバによれば、メシヤの中間時代の王国は、荒れ野時代になぞらえられた戦いの時代として40年つづくと言われる。また、義の教師の死と神の支配の到来までの間にも、同じく40年があるとされている¹。しかし、新約聖書には、そのように荒れ野時代の40年を、そのまま黙示文学的な救済史に適用した例は、見出だされない。見いだされるのは、イエスが荒れ野で試みに合われたという40日のことだけである。

その際、マタイ4 ; 2においては、イエスの断食のモチーフによって、四十日四十夜 (*ἡμέρας τεσσαεράκοντα καὶ τεσσαεράκοντα νύκτας*) が、シナイ山上におけるモーセの断食に関連づけられている²。そのことは、ルカ4 ; 2f. についても言い得る³。ルカにおいては、試みを断食後の空腹感に結びつけることによって、誘惑の固有のモチーフが40日の終わりに繰り下げられているので、モーセ原型論がそれだけ顕著である。これらマタイとルカに共通のQ資料においては、イエスの40日間の荒れ野滞在が、その原型として、イスラエルの40年間の荒れ野時代に関連づけられていたことは明らかであろう。

マルコは、Q資料とは異なり⁴、簡潔に述べている。「それから、霊はイエスを荒れ野に送り出した。イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた」

(1 ; 12~13)

ここでは、イエスに対する誘惑の40日間は、ヨハネによるバプテスマの直後におかれている。それによって、この荒れ野の40日間は、イエスがメシヤとしての自らの任務に対する真の従順を先取りする期間として意義づけられる。

マルコ 1 ; 13によれば、イエスの荒れ野滞在は、特別な神の臨在とともに試練の典型である。しかし、ブルトマンは、「サタンから誘惑を受けられた」(πειραζόμενος ὑπὸ τοῦ σατανᾶ)をマルコの付加語として、元来は誘惑物語りではなかったとする。即ち、これは、アダム の墮落以後人類が敵対関係にあった野獣との平和を取り戻した楽園の人としてイエスを描き出そうとした物語りであるとしている⁵。その際、語られているのが、年数についてか日数についてかは、問題ではない⁶。重要なのはむしろ次のことである。即ち、野獣と共にある(μετὰ τῶν θηρίων)イエスの存在と天使たちの奉仕によって、荒れ野は今や、終末論的な和解と恩恵の支配する楽園として特徴づけられているということである⁷。そして、ここに、荒れ野時代の40年の意味を究極的に深化しかつ転換した新約聖書独自の理解があると言ってよいだろう。新約聖書の知っているその転換点とは、イエスという無比の存在である。イエスこそ、荒れ野時代に中保者の役割を果たした存在モーセによって指し示されていた真の中保者にほかならない。

1. Balz, op. cit. S. 137

2. Strack Billerbeck, Kommentar zum NT. , Bd. I, S. 150 出³34 ; 28, 申 9 ; 9, 11, 18, 25, 10 ; 10. Driver, S. R. , Deuteronomy⁸, ICC. P. 113

3. Creed, J. M. The Gospel According to St. Luke, P. 61~64 Manson, W. , The Gospel of Luke, P. 35~39 Montefior, C. G. The SynopticGospels, Vol. I. , P. 18~24, 392f. Plummer, A. The Gospel According to S. Luke (ICC), 105~115 Godet, F. , A Commentary on The Gospel of St. Luke, Vol. I. P. 207~226

4. Schweitzer, E. , Evangelium nach Markus, シュヴァイツァーは、マルコには、Q資料と違い、モーセ及びイスラエルのモチーフではなく、アダムというモチーフが伏在していると見る。

5. Bultmann, Die Geschichte der Synoptische Tradition (E. Tr. John Marsh. P.

253f.)

6. A. Feuillet, L' Episode de la tentation d' apres l' evangile selon Saint Marc, 1; 12f.
7. Balz, op. cit. . S. 138, U. Holzmeister, "Jesus lebte mit den wilden Tieren" Schweitzer, op. cit. イザヤ11; 6fはメシアの国においては野獣の中に平和が支配することを予言している。詩91; 11~13によれば、天使たちが義人を守り、野獣も彼に害を加えることができない。

結 語

聖書における40年の意味というとき、まず聖書以外の世界における用法をも含めた一般的な意味での「充分な長さ」という意味がある。しかし、聖書における「充分な長さ」の40年は、ほとんど、原型としてのイスラエルの荒れ野時代の40年に密接な関連をもっている。そこで、聖書においては、40年が単なる「充分な長さ」ではなく、さらに特別な意味を持つてくる。即ち、原型としての荒れ野放浪時代の40年は、一面では神の刑罰の期間であり、もう一面では神の恵の期間である。旧約聖書におけるそのような荒れ野時代の両義性についての理解は、新約聖書にもほとんどそのまま継承されている。しかし、新約聖書には、さらに新しい独自の理解が響き始めている。イエスの荒れ野滞在の40日をめぐる叙述において特にそうである。

マルコは、イエスの荒れ野の試みを叙述する際、原型としてモーセではなく、アダムのモチーフを意識していたと見られる。例えば、E. シュヴァイツァーは次のように指摘している。即ち、ユダヤ教の伝統的思想によれば、アダムは墮罪以前は野獣を支配していたのであり、天使たちが彼のために肉を焼き、葡萄酒を濾す務めすら果していたのだが、彼の墮罪と共に野獣との戦いが始まった、とされている。教団はこの物語を語り伝えたとき、イエスこそ終わりの義人として到来したのであり、彼もアダムと同じように、神の任務を授けられたのち、直ちに試みにあったのだが、ここではアダムとは違って、この試みに打ち勝ち、それによって楽園を回復したのだということを、多分念頭においていたのであろう¹⁾というわけである。マルコによれば、荒れ野の試みの時はイエスの勝利によって、今やイスラエルのためのみならず全人類のために、終末論的な和解と恩恵の楽園の時として回復されるのである。しかも、その荒れ野の叙述は、イエスの全公生涯にわたる戦いと従順に

よってもたらされる神との和解の出来事を指し示しているのである。

そのマルコと異なり、マタイとルカが共用したQ資料においては、イエスの荒れ野における試みの原型として、荒れ野時代のモーセのモチーフが意識されている。神を試みる民の試みと偶像を拝する民の背信によって苦しめられながらもその使命を全うしたモーセのように、イエスは、荒れ野における悪魔の試みに身を晒しつつこれに勝利して解放をもたらす救いの約束の成就者であるというのである。使徒パウロも、荒れ野における民の試みについて触れ、「主を試みた者は、蛇にかまれて滅んだ」²と書いた。しかしそれだけでなく、さらに「試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていくくださる」³と述べている。ヨハネ福音書においては、その荒れ野時代の事件とイエスの存在そのものが、より明確な仕方で結び付けられている。「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである」⁴。民が主を試みたので、ヤハウェは炎の蛇を送って民をかみ滅ぼさせた。しかし、モーセが蛇を取り除いてくれるよう祈ると、ヤハウェはモーセに炎の蛇を造らせ旗竿の先に掲げさせた。その青銅の蛇を仰ぐと、かまれた人も命を得たという荒れ野時代の伝承を踏まえた言明である。この言明によれば、神の刑罰を取り除くべく、民に代わってそれを受けるためにイエスは上げられなければならない。そこで、十字架に上げられたイエスによって、信じる者には刑罰に代えて永遠の命が与えられるのである。刑罰の下にあった「もろもろの国の荒れ野」は、イエスによって、今や恩寵の支配する王国である。ここにおいて、マルコによる荒れ野の試みの叙述が意味するところとも一致する。

かつて刑罰を意味した荒れ野は、上げられたイエスのゆえに、今や終末論的な和解と恩寵の支配する楽園である。その和解と恩寵の支配の下では、刑罰の時をも悔い改めによって試練の時、恵の時として顧みることを許されている。新約聖書における40年の意味は、それ以外ではないであろう。いや、50年であろうと、百年であろうと、はたまた千年であろうと、聖書的な意味においては、特にそれ以上のことでも、それ以下のことでもないであろう。

1. E. Schweitzer, op. cit. S. 48

2. 民21; 6, コリ I, 10; 9

3. コリ I, 10; 13, Robertson, A. & Plummer, A., The First Epistle of St Paul to The Corinthians (ICC), P. 209「逃れる道」という訳は、'εκβασις

三枝 禮三

の前の冠詞を無視したもので、むしろ「逃れるのに必要な道」(the necessary way of escape)と訳すべきである。

4. ヨハネ福音 3 ; 14f.

Bultmann, R. , Das Evangelium des Johannes, S. 109f. プルトマンは、このような民数記21 ; 8fの類型学的な適用について、その出所は、多分ユダヤの伝承を継承したキリスト教的伝承であろうと言っている。ヨハネはここで、イエスを蛇になぞらえることには少しも重きを置いていない。ヨハネが強調しているのは、「挙げられる(ὁ φῶθ ἡ ἰσάρι)」という点である。しかし、それは何ら民数記21 ; 8fの蛇崇拝とは関係ない。

Dodd, C. H. , The Interpre. of The Fourth Gospel, P. 376 ドッドによれば、荒れ野の蛇の比喩は、神のビジョンへ向けて人間の心を引き上げる神の像(ἐκκώλυ)に関するヘルメス文書の説を参照しつつ解釈されるべきであると言う。

Schulz, S. , Evangelium nach Johannes, (松田伊作訳) 人の子として、イエスは神の定められたやり方で、まず第一に、荒れ野における銅の蛇によって予表されたように、十字架の上に挙げられなければならない。

《参考文献》

荒井献, 使徒行伝上巻 現代新約注解全書 1977

Balz, H. , *τεσσαερακόβτα, τεσσαερακουντετής* in Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament, Bd. VIII, S. 135~139

Bultmann, R. Die Geschichte der Synoptische Tradition, E. tr. by John Marsh 1963

Bultmann, R. Das Evangelium des Johannes¹¹, 1950

Burton, E. W. The Epistle To The Garatians, International Critical Commentary, 1952

Conzelmann, H. Die Apostelgeschichte ; Handbuch zum Neuen Testament, 1963

Creed, J. M. , The Gospel According to St. Luke⁸, 1969

Dodd, C. H. , The Interpretation of The Fourth Gospel, 1972

Driver, S. R. Critical And Exegetical Commentary on Deutronomy, ICC. 1960

Godet, F. , A. Commentary on The Gospel of St. Luke, Vol. 1870

聖書における40年の意味

- Noth, M. Überlieferungsgeschichte des Pentateuch, 山我哲雄訳 1943
- Noth, M. Überlieferungsgeschichte Studien—Die sammelnden und bearbeitenden Geschichtswerke im Alten Testament, 山我哲雄訳 1967
- Montefiore, C. G. , The Synoptic Gospels, 1968
- Pope, M. H. , Number, in The Interpreter's Dictionary of The Bible, Vol. III, P. 561~567
- Rad, G. von, Theologie des Alten Testament, 荒井章三訳 1980
- Schimmel, A. , Zahlensymbolik in Die Religion in Geschichte und Gegenwart³, Bd. VI, S. 1861~1863
- Schmidt, H. , Die Psalmen, Handbuch zum Alten Testament, 1934
- Stählin, G. Die Apostelgeschichte, NTD. 大友陽子, 秀村欣次, 渡辺洋太郎共訳 1968
- Schweitzer, E. , Das Evangelium nach Markus, NTD. 高橋三郎訳 1976
- Schweitzer, E. , Das Evangelium nach Mattäus, NTD. 佐竹明訳 1973
- 田川健三, マルコ福音書 上巻 現代新約注解全書 1972
- Taylor, V. The Gospel According to St. Mark 1953
- Weiser, A. , Das Buch Jeremias, ATD. 月本昭男訳 1976